

〈盗作〉の文学史

市場・メディア・著作権

栗原裕一郎著(新曜社・3990円)

文字通りの劣作。「文芸における盗作事件のデータをここまで揃えた書物は過去に例がなく、類書が絶無にちかいかただけは自信をもって断言できる」と著者自身が断わっている。確かに新聞雑誌の小さな記事まで参照されていて感嘆する。

とはいえ難しい研究書ではない。文末に参照記事が明示されていて研究にも役立つようになってきているが、とにかく読み出したら止められない。つまりすべれた読み物、いや、画期的な文芸評論なのだ。

読ませるのは、もちろん語られている内容が面白いから。仮名垣魯文の盗作事件はじめ、明治時代から説き起すが、それは序章のみ。第一章「メディアの事件としての盗作疑惑」で、一気に一九六〇年代に突入、倉橋由美子の『暗い旅』と庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』が取り上げられている。前者はビュートル『心変わり』の、後者はサリンツァ

「『ライ麦畑でつかまえて』の盗作ではないかというもの。だったら村上春樹だって盗作じゃないかと思ってしまうが、それが立派な疑惑に仕立て上げられたのは、メディアが盗作騒動を煽ったから。」

疑惑報道を煽るのは新聞か週刊誌。週刊誌にしても新聞社系と出版社系では違う。それらの対立抗争を浮き彫りにすることで、本書は卓抜

冷静さの背後にある鋭敏な批評精神

なメディア研究になっているのだが、それにとまらない。ポストモダンふうのグネグネした議論はいっさい避けるために、「この本では、努めて散文的即物的に資料を洗いだし、事件の概要を整理し、必要なら検証を加える、という方針が採られている。批評も基本的にはしない」とあるが、そのさわやかな冷静さが類を見ない批評になっている。

たとえば江藤淳の倉橋批判は結果的に小説家の実験精神を抑圧したし、新聞や週刊誌の庄司叩きは、大衆社会現出のさなかで当惑するエリートという庄司本来の主題を覆い隠した。古い主題ではない。エリートの当惑と、それに続くエリート無用論とが、結局は今日の政官財の総無責任体制を形成してしまっただけであり、そういう意味では、日本社会はいまも庄司の問題提起から一歩も出していない。

表向きは盗作事件を丁寧に取り上げながら、一皮めくると鋭敏な批評精神が息づいている。第二章は新人賞が社会的事件になった世相を、第三章は流行作家が映画やテレビに素

材を提供するようになった世相を活写するが、ここでも山崎豊子『不毛地帯』への切り込みが鋭い。要は、シベリア抑留者のあいだに起こった旧日本軍の位階制を廃止しようとする民主化運動がどう描かれるかに一九七三年当時の左右両翼の関心が向けられていたということであり、それこそ盗作疑惑が煽られた最大の理由だったという。

第四巻では、宮原昭夫『誰かが触った』、網淵謙鋭『佞』、立松和平『光の雨』が狙上に上る。問題になるのは歴史的事実とは何かということなのだが、浮き上がってくるのは、平野謙をはじめ文学者がおしなべて話題を矮小化しているという事実だ。塩野七生に第一次資料つまり現場にいたものの証言がいちばん怪しいという名言がある。だが、史実なるものを利用して書く側もそれを批評する側もそこまで降りていかない。鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」から小林秀雄の「歴史について」へいたる考察がいっこうに深められていないことへの批判だ。

同じことは第五巻で取り上げられた井伏鱒二『黒い雨』盗作疑惑問題についても言える。論争が表面的なところで右往左往しているという。だが、このちょっとした鬱屈は寺山修司の俳句を論じた第二節「模倣が切りひらいた地平」でやや晴れる。というのも、自作をはじめとする俳句を短歌に組み換えてみせた寺山のスキヤンダラスな行為によって、以後、短歌の抒情を俳句に盛り、俳句の叙景を短歌に歌うという領域横断が活発になったからだ。短詩型芸術への新鮮な視点である。

第六巻では漫画から小説へ、評伝からテレビドラマへという過程での盗作疑惑が語られ、第七章ではインターネットから小説へという過程での盗作疑惑、さらに匿名による告発を無限に可能にするインターネットのもつ不気味さが語られる。第一章から第五章までもっぱら新聞、週刊誌による告発だったことを思えば隔世の感がある。いまや、インターネットの影響力を測りかねた末の「うろたえのようなものが旧メディア側には垣間見える」と著者は述べているが、中国だけではない、日本においてもこれは紛れもない事実だ。

第一章で示唆された庄司の危惧はインターネットすなわち一般大衆の圧倒的勝利で終わったことになるわけだが、むしろ事態はそれほど単純ではない。インターネットに書き込むものたちは、「気分はエリート」なのだから。むしろ、庄司の主人公の屈折した心情はいわゆる「2ちゃんねらー」にこそ通じる。

スキヤンダラスな主題にもかかわらず、全編、これほどさわやかにまとめあげた手腕に敬服する。